

らしっく

自分らしく、粋なくらし

まちづくり・生涯学習情報誌

2011.3 Vol.29 | 春曙号

しゅんしょ／『枕草子』にも「春は曙」（春は曙が良い）という有名な文があります。厳しかった冬が終わり、新しい季節への期待とぬくもりを感じます。

- 特集「未来への想い」…………… p1
- らしっくキャンパス／らしっくコラム …… p4
- プラザ通信 …………… p5
- らしっく情報の森 …………… p9
- ひろしま八区イベントガイド …………… p11



「未来への想い」

地域のふれあいを取り戻し心豊かで住みよいまちづくりへ ● 鈴が峰空き教室大学
豊かな自然とそこで培われた人の知恵。

湯来の魅力を未来へつないでいきたい ● 湯来ふるさとプロジェクト

城下町広島を支えた伝馬船。信仰や習俗を伝承する貴重な財産 ● 江波漕伝馬保存会
らしっくキャンパス ● わんぱく登山部スポーツ少年団

「SB、CBのこれから、発展性」 ● 中国CB／SB推進協議会 吉長 成恭





「未来への想い」

広く知ってもらうことを目的にする活動がある一方で、長く未来へ伝えることを目指している活動もあります。伝統や自然、人との関わり方など、先人の残した財産を将来へつなぐための活動を進めている団体を取り上げます。

地域のふれあいを取り戻し 心豊かで住みよいまちづくりへ

「鈴が峰空き教室大学」

☎082・276・0061

▲学校側との連携で、毎年恒例となった「昔遊び」の特別授業は、児童たちも楽しみにしているそうだ。メンコを囲む1年生にメンバー2人がメンコの使い方やルールを教えていた。



住民が集い地域力を強化
鈴が峰小学校の空いた教室を使つて地域住民が学ぶ場が「鈴が峰空き教室大学」です。モットーは「教えあい 学びあい ふれあい」。地域の人を中心に、知識や経験が豊富な人、特技がある人に講師をしてもらい、時事問題からスポーツ、音楽まで学んでいます。

きっかけは7年前。ピーク時には1200人いた小学生が400人程度に減少。教室がいくつも空いて、校内に人がいない場所が目立つようになりました。そこで、こ



▲完成間近のジオラマ。鈴が峰団地ができた32年前は、宮島街道（旧・国道2号線）から南側はまだ海だった。

活動の始まりは合併を記念して行った、佐伯区スポーツセンター湯来体育館向かいにある小さな山、『狐原山』の桜の植樹です。荒れた山を整備し、遊歩道をつけて頂上までの数百メートルを散策できるようにしました。現在、遊歩道は桜の並木になり周辺にもクヌギやカエデなどを植える作業を定期的に続けています。狐原山をたくさんの方が集まる憩いの山にしようという計画で、現在も進行中です。

植樹も、年に2、3回行う下刈り作業も、参加者は一般から募集。毎回20、30人の人が町内外から集まります。リピーターも多く、自分の植えた木が気になって世話をする人もいます。「何かをきっかけに湯来の魅力に触れて、愛着を感じてもらえたらいい」と代表の佐々木大五朗さんは言います。

多くの人に気持ちよく訪れてもらえるよう、湯来に続く幹線道路をきれいにする活動「クリー



▲クリーン・グリーン活動で、道路を掃除する参加者の皆さん。この後、花などを植え、美しい景観づくりを目指す。

ミニティの弱体化が問題になっている昨今、空いた教室を利用して住民の連携を広げようという試みと、校内に大人たちが集うことで学校の安全管理にも役立つのではないかといい思いで、有志が集まったのが始まりでした。

地域で子どもを育てる

空き教室大学は3階の奥の教室を使っています。これは大切なポイントなのだそう。階段を上るのは決して楽ではありませんが、すれちがう子どもたちと元気にあいさつを交わし、子どもたちとの交流が自然に生まれています。今では学校に児童と大人がいるのも自然な光景になっています。

学校行事に参加することもあります。校内にある水田では、一緒に田植えや稲刈りをし、収穫後は1月のとんど祭で餅つきをしてみんなで食べました。時には、児童たちが受けている算数や理科などの授業に参加させてもらうこともあるそうです。

取材の日には空き教室大学のメンバーが先生になって、1年生に昔遊びを教えていました。たこ揚げやお手玉、こま回しなど、班に分かれて挑戦。教える側も教わる側も生き生きとした表情で楽しんでいました。「学校の理解と協力がなければできないこと。大人も子どももお互い学びあえることがたくさんあります。

ン・グリーン」も実施。沿線に多く見られた不法投棄物を片付け、花を植えています。

名物・大釜こんにやく

湯来町は、こんにやくの産地でもあります。地元産のこんにやく芋を使った伝統的なこんにやくのPRも活動のひとつで、こんにやく芋の栽培からこんにやく作りまでを行い、イベントでは直径17メートルもある大釜で作るこんにやくが評判になっています。毎年恒例の、水内ふるさと祭りでは昨秋、100kg級のこんにやく作り挑戦し、見事140kgのこんにやくが完成。見た目の迫力もさることながら、味も好評で、毎回売り切れで足りなくなるそうです。

▲湯来産のこんにやく芋を五右衛門風呂のような大釜で煮て、大こんにやくをつくる。かまどと薪を利用した伝統的な製法だ。



伝えたい暮らしの知恵

どの活動も、湯来ふるさとプロジェクトだけの活動ではなく、地



▶指導するメンバーをまね、お手玉にチャレンジする児童たち。成功すると笑顔がこぼれる。

すね」と、メンバーの一人は言います。今年の卒業制作は、鈴が峰が生んだ2つの団地のジオラマ作り。これまでの修了生も、鈴が峰の歴史をつづった冊子やパネルを作りました。それらをまとめて、校内にふるさと資料館をつくる準備が進んでいます。子どもたちが、自分の育ったまちの歴史や背景を知るための学習材料になることでしょう。

横と縦のつながりを求めて

「地域のつながりと世代間のつながりを取り戻すことが大切だと思います。地域全体が昔の長屋社会のように、大人も子どもも、皆が声を掛けあえるような関係を目指しています。まちが変わったと言えないようにするのはもっと先だと思いますが、そうなる予感のようなものはあります」と代表の川島孝雄さんは手応えを感じているようです。この取り組みが、まちづくりのひとつのモデルケースになる日も遠くはないかもしれません。



▶植樹イベントで、自分たちの記念樹を植える参加者。大きく育てば、ふもとからでも見える距離の近さも狐原山の魅力だ。

元の人たちの協力が欠かせないとのこと。まち全体を巻き込んだ活動ができるのは、地元の人に愛され、応援されている証拠とも言えるでしょう。

活動を通じて触れられる湯来の魅力は、豊かな自然だけではなく、手入れの仕方など、高齢の方から教わる暮らしの知恵が素晴らしいのです。こんにやく作りでも、火のおこし方、薪の入れ方など、勉強になることばかり。もちろん着火材なんて使いませんよ」と話す佐々木さんはメンバーの中で2番目に若い33歳。「この活動は、自然を残し、まちの魅力を育て知恵を伝える活動。子どもや若い人にもぜひ体験してほしいと思っています」とのメッセージには力がこもっていました。

豊かな自然とそこで培われた人の知恵。 湯来の魅力を未来へつないでいきたい

「湯来ふるさとプロジェクト」

<http://yukipuro.web.fc2.com/> メール:s-hiraki@enjoy.ne.jp

桜が咲く憩いの山へ

2005年、湯来町と広島市の合併を機に、「湯来の魅力をもっとアピールして、生き生きしたまちにしよう」と始まったのが、湯来ふるさとプロジェクトの活動です。

らしくキャンパス

今回のらしくキャンパスでは、全国でも珍しい小学生登山部である、わんぱく登山部スポーツ少年団に取材に行かせていただき、担当の今村さんにお話を伺ってきました。

未来を担う子どもたちに山登りを

わんぱく登山部は2007年に広島県山岳連盟の中で誕生しました。現在では同連盟の加盟団体として独立し活動されています。現在、合計32名の子どもたちが年間約9回山登りをしています。

なぜ山登りなのかと伺うと、「山登りが好きだから」というシンプルな答えが返ってきました。山はもちろん人も自然の一部であり、人の成長には自然が関係しています。しかし今、自然の中で遊ぶ子どもが減りつつあります。機会がないのであれば、自分たちでつくる!そんな思いでわんぱく登山部がつくられました。

わんぱく登山部の活動は主に日帰りを基本としています。日常生活の中で山登りをすることで、子どもたちに自然を身近な存在として捉えてほしいからだそうです。

また、技術や知識ではなく「楽しい」「好き」といった気持ちを、山登りを通して子どもたちに感じてほしい、と考えていらっしゃる。

第7回 りしくコラム

こちらのコーナーでは、広島市で活動されている団体・事務局の方に市民活動やボランティアに対する思いをお聞きしています。今年度は、社会的課題を解決するビジネスとして、また、地域における安定的な雇用創出の受け皿として期待される「ソーシャルビジネス(SB)」・「コミュニティビジネス(CB)」についてお聞きしています。

SB・CBのこれから、発展性

社会的課題をビジネス手法で解決するビジネスモデルが活発になってきました。その担い手は、事業型NPOや企業、公益的セクターなど組織の形式はさまざまです。平成20年以降、SB/CB事業者へは、内閣府や経済産業省ほか関係府省庁、都道府県

からの支援施策が展開されてきました。経営支援では地域での中間支援機能強化やノウハウ移転支援事業を、人材育成では内閣府の地域社会雇用創造事業、資金調達では日本政策金融公庫に融資制度創設、普及啓発では「SB55選」の公表、ネットワークでは地域SBブロック協議会の設置などが取り組まれています。

SB/CBは、いまや暮らしやすい豊かな地

わんぱく登山部スポーツ少年団
今村 みずほさん



たくさんのことを子どもたちに伝えていこうとされているわんぱく登山部ですが、講義や説明などではなく、大人が自ら行動する姿勢で伝えていくことが大切だと感じているそうです。

未来への目標は、「人自身の中に自然をかえしていきたい。自然というのは人間が心身ともに成長していく過程で密接に関係している。今、人の中に自然が減りつつある。山登りを通してまずは子どもたちの中にかえしていくことをしたい。」とおっしゃっていました。

自然と触れ合うことで、人間としても大きく成長できる。山登りにはそんな魅力もあるのだと感じました。



▲活動の様子

山登りという、しんどい・つらいといったイメージを持っていました。今回の取材で、子どものうちから自然に慣れ親しんでいくことが自分の成長にもつながると感じました。そして、自分の知らなかった世界を知ることができました。ありがとうございました。

レポーター 広島経済大学 FMハムスター OSC放送記者 田中詩織

域社会を支える経済成長戦略や新しい産業構造のエンジンとなりつつあります。

これからさらにSB市場は大きく拡大して発展する方向にあります。とりわけ介護・福祉、まちづくり、環境、教育などの分野でSBへの期待は大きく、その市場性が注目されています。引き続きこのSB市場の実現化のために、SB事業者のさらなる振興に向けた方策が充実し、SB自立化のために多様な関係機関(国、自治体、商工団体、中間支援機関、金融機関、大学など)の連携による支援体制が構築されることによって、SB市場の環境整備が伸展するでしょう。特に注目すべきは、企業との連携です。大企業のCSRとの連携はもとより、中小企業とSB事業者との連携が期待されます。公的支援では中小企業支援策との連携が重要な役割を果たしていくでしょう。社会的課題をビジネス手法で解決するSB/CBは、今や企業の経営課題を解決するビジネスモデルになっています。

吉長 成恭 よしなが はるゆき

■所属団体・役職 中国CB/SB推進協議会 幹事長
■団体概要 中国地域において、CB/SB事業者および支援者がネットワークを形成し、社会的課題をビジネスとして解決する動きを活性化させていく「場」を構築するために設立。意見交換・交流などを行い、中国地域の具体的な課題を解決していく自立的な組織となることを目指す。



▲厳島神社の管弦祭は、地御前神社を訪れた厳島神社の神様を迎えに行く行事。船は片道40〜50分の道のりを往復する。

江戸時代に活躍した伝馬船

江波の港は、明治時代に宇品港ができるまで、広島湾で一番大きい港でした。伝馬船とは、大型船と岸との間を往復して、荷の積み降ろしなどをする小型の船。江波でもたくさんの伝馬船

が活躍し、江戸時代には港から広島城まで荷物を運ぶ仕事も担っていました。

時代が変わり、役目を終えた江波の伝馬船ですが、現在は2つの行事で活躍中です。日本三大船神事のひとつ宮島の管弦祭と、地元の神事である江波の火

伝統行事で大きな役割

管弦祭で江波の伝馬船が担うのは、神様の乗る管弦船をえい航する大役。美しい雅楽の調べに乗せて、こぎ手14人が息を合わせて厳島神社と対岸の地御前神社を往復する荘厳な姿が見られます。

江波の火祭りはオットーラン祭りとも呼ばれ、広島市の指定重要無形文化財に指定されています。地域の氏子の無病息災を願って行う祭事で、衣羽神社の神様が、昼は子どもたちの担ぐみこしに乗って陸から、夜は伝馬船に乗って海から様子を見守ると言われています。港内と川沿いに、6カ所の火山(焚火台)が設置さ

江波漕伝馬船の行事

- 7月16日(土):管弦祭前日のあいさつ行事
漕伝馬船が本川を上り、巡回する
- 7月17日(日):管弦祭
- 7月29日(金):江波の火祭り



▶斗缶の音と大きな掛け声が響く江波の火祭り。真夏の夜、大きく燃え上がる炎と伝馬船の雄々しさに胸が高鳴る。

れ、神様の道を照らし、伝馬船は御座船を引いて各火山前で3回ずつ巡回するのが最大の見せ場。管弦祭とは雰囲気の違い、「オットーランジャ(神様のお通りじや)」と大きな声をかけながら一斗缶をカンカンと叩く、威勢のよいお祭りです。

美しい伝統を後世に

江波の伝馬船は、船の形とこぎ方に特徴があります。櫂を自由に操って前にも後にも進むことができ、中州など、ひざの深さ程度の浅瀬にも入っていきます。祭事で行われる巡回では、左右の舷で前後逆方向にこぐことで、最小径で巡回することができるようなんです。

江波の人にとって、伝馬船に乗ることは誇りでした。かつては地元若者も多く、こぎ手になれるのは一度きり。保存会副会長

の沖山和都さんは43年前に船をこぎ、不思議な体験をしました。「管弦祭の終盤で、地御前神社から戻り鳥居をくぐると、神社の本殿の上に浮かぶ月がちやうど見えるのですが、鳥居をくぐった瞬間にピリッと体に電流が流れるような感覚を感じました。美しさからなのか、別の力なのか今でも分かりません。でも、忘れられないのです」。保存会に集まってきたのはそういう体験をした者ばかりだと言います。船長の笹木三郎さんは「魅せられると同時に、この美しい伝統行事を未来に伝えなければいけないという責任を感じます」と力強い口調で言われました。

現在は、管弦祭前の3週間の練習に参加できる人なら、誰でもこぎ手に応募できるそうです。

▲管弦祭で神様が乗る御座船と共に引くのが、江波の伝馬船と阿賀(呉市)の鯛網船。両船のこぎ方の違いも興味深い。

